**「ぼくもみんなと同じようにしたい」**

**～統合保育における子どもの育ちをつぶやきから探る～**

鳥取福祉会

むつみ保育園　前田陽子

1. 問題提起

平成２２年、私は肢体不自由児Ａ児と出会った。０歳児クラスに途中入所してきたＡ児は、笑顔を誰にでも振りまき周りの人を明るくする不思議な力をもつ。Ａ児の家族は、母親、兄２人、弟１人の５人家族。母親１人で４人の子どもを育ててきた。元来、人と関わることが苦手な母親は、Ａ児の障がいを受け入れられず一人で不安をかかえており、療育園での必要なリハビリは十分行えていなかった。

Ａ児は２歳になるとギプスを装着し、４歳になると両下肢の手術をするなど、歩行器や杖による歩行訓練を行うようになっていた。そして、５歳になったある日、「なんで、ぼくはあるけないの？」と母親に質問し、弟にも「なんであるけるようになったの？」と素朴に問いかけることがあった。歩行が困難な自分と、益々活発になる友だちとの違いを感じ、園での活動をあきらめそうになっていたＡ児。

集団生活における障がいのある児とない児との関わりが、お互いの成長に大きな意義を見出していることはどの保育現場でも言われている。当保育園でも、こうした統合保育に取り組んで久しくなる。Ａ児が周りの個性豊かな子どもたちと何でも言い合い、互いに認め合う関係性を育んでいくための支援、そして母親の不安な思いに寄り添う支援について、多角的に研究していきたいと考えた。

1. 目的
	1. Ａ児が主体的に周りの子どもたちとの仲間関係を構築していく支援方法を探る。
	2. 「統合保育」においてお互いを認め合う関係づくりをめざす。
2. 方法
	1. Ａ児、周りの子ども、母親の個々がめざす姿を明確にする。
	2. 専門機関と連携を取りながら、担任と発達支援チームで必要な支援方法について実践する。
	3. 子ども達のエピソードを記録にとどめ類型化し、子どもへの理解を広げながら仲間関係について具体的な支援を考察する。
3. 内容

年度当初の母親への聞き取りによって、「自分から友達に向かって、したいことを主張できる子になってほしい」という願いを持っておられるのが分かった。その上で

* 1. Ａ児、周りの子ども、母親の各々の目指す姿を明確にする。

Ａ　児　･･････・「やってみたい！」をあきらめない

・仲間に向けて自分の思いを出せる

周りの子ども･･・思いを出し合い受け止めながら、友達の困り感に寄り添う

母　親　･･････・Ａ児の成長を喜び、障がいを個性として受け入れる

そして一年を４期に分けて、それぞれ（Ａ児、周りの子ども）のめざす目標を立てて取り組むことにした。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（※後ページに「Ａ児と周りの子どもたちとの関係づくりの目安」の表を添付）

* 1. 専門機関との連携を基に、支援方法について工夫する。
		1. 生活環境を整える

・机、椅子の高さ、動線を考えた配置

・トイレでの排泄が自分でできるように環境を整える（療育園の指導のもと）

* + 1. ストレッチの時間確保

・療育園での情報を常に共有し合い、同じような内容でリハビリや歩行訓練ができるようにする。

　　　　　　　　　　　　・少しの緊張が原因で身体の硬直が見られるＡ児には、毎日のリハビリが重要。生活のスケジュールの中に、リハビリの時間を定着させる。

* + 1. 遊びや行事で使うものをＡ児が楽しめるように工夫

・発達支援チームで情報交換の場をつくりアイデアを出し合う。

例：傘踊りの傘の柄を工夫（長さ・太さ）

　　　　　　　プールで使う浮輪を安定する物に工夫（鳥取養護学校見学時、参考）

「アダブテッドスポーツ」の紹介と実践　・運動会の参加の仕方について　　など

* 1. エピソードの類型化と考察　～Ａ児と周りの子どもたちの関係性について分析～

[約７０（12月時点）のエピソードにテーマをつけ４期のめやすに添って分析]

* + 1. Ⅰ期　「僕もしてみたい」～主体的な気持ちを発信・主体性を伸ばす～

この時期は、Ａ児が安心感・安全感を感じながら、自分の中にある力を少しでも伸ばしてほしいと考え、「やってみたい」と思ったら、何でも言って！先生が手伝うから！」と常に伝えていった。子どもの国のｱｽﾚﾁｯｸの最上階の鐘を鳴らしに上がったり、保育者におぶってもらい風を切って鬼ごっこを楽しんだり、年長クラス憧れの当番活動に仲間と同じように参加したりして、「あーおもしろかった」「また、しよう！」「やってみたい」の言葉がＡ児からよく聞かれるようになる。新しい事ができたという経験が喜びとなり、次の活動への意欲・感心につながっていった。

　　　　　　　一方、この時期は、就学後を考慮してストレッチや歩行訓練を重視したこともあり、保育者との１対１の関わりが多かったため、次のようなこともあった。

エピソード１：園外保育

園外保育に出かけた時に、少しの段差で車いすが動かない状況に、他の担任や子どもたちが気付かないで先に行ってしまう。

エピソード２：「せんせいがいないとあるけんくせに」

階段の柵につかまり一段ずつ上がっているＡ児に、

Ｂ児　「○○せんせいがいないとあるけんくせに！」と、言って友達と上がっていく。

Ａ児は聞こえていたようだが、特に反応せず、一段ずつ階段を上がる。

保育者は、Ｂ児の言葉に特に触れず、階段を上がるＡ児に「そうそう、上手だよ。」と励ましながら一緒に階段を上がる。

※Ｂ児は、注目されると不安になる傾向にあった。家庭環境を考慮し、Ｂ児が様々な成功体験を通して自信をつけていくために、個別の関わりを配慮し様子を見ていくことにした。

以上のことは、「Ａ君は○○先生といつも一緒。だから、Ａ君のことは○○先生に任せたらいい」といった気持ちを、周りの子どもや保育士が持っているのではないか。Ａ児を“クラスの仲間”として意識し関わりを持つような、配慮が必要と振り返った。

　　　　　　そこで、この1期では、

「Ａ児の困り感や頑張っている様子を、具体的にクラスの子どもや保育士に伝える」としたうえで、次のような見直しをした。

【見直し①】

　・ストレッチは、仲間の見える場所で行う

・担任間で常に報告、相談をし合う

・クラスの子どもたちにＡ児への関わりが見られたら、認める言葉がけをする

* + 1. Ⅱ期　「友だちと同じようにしたい」～保育士の見守りの中で、自信を膨らませる～

この頃、友達を怒ったりすることはなく、いつも穏やかな表情をしているＣ児が、Ａ児と一緒に居たがるようになり、生活の場面で助けてもらったり、遊びの楽しさを共有して笑顔での会話が聞かれたりするようになった。そこで、グループ替えの際、二人を同じグループにすることにした。

また、夏ならではのプール遊びでは、体の関節が硬いＡ児に、“水に浮かぶ感覚を感じることで心も体もリラックスする”ことを意識し、ビート板を取り付けた浮輪を用意した。（鳥取養護学校見学の際、プールでのリハビリの様子を参考）

エピソード３：浮き輪を使ってプール遊び

ビート板をとり取り付けた浮き輪に、体をあずけて浮かんでみるＡ君。「うわー！らくちんらく

ちん。きっもちいい。」何度か経験をすると、「せんせい、てをはなして！いいけぇ！」と浮か

ぶ感じを一人で楽しむ。

やがて、浮輪を使うことなく、大胆にプール遊びを楽しむようになる。

エピソード４：一人でワニ歩き

顔を水につけて、ワニ歩きでプールの端から端にゴールした後

Ａ児　「しらんうちにプールのかいだんのところについとったわ！（笑）びっくりしたァ（得意そうな表情）」

プール納めの日には、

エピソード５：みんなでよーいドン

Ｃ児が自分のところにいつもいるので、とてもうれしそう。ワニ歩きや顔付けも、自信をもって思い切りできる。

Ｃ児「Ａ君といっしょ」

Ａ児「Ｂ君、およごうで」

と言って泳ごうとすると、周りに男児4人が集まり･･･

男児「きょうそうしよう！」「いくでー！･･･せーのー！」

Ａ児　泳ぐ気満々。4人の友だちの後ろから思い切り水の中に入って、顔を付けてプールの端まで行く。（保育者が、少しお尻を押して進ませる）

「一人で思い切りおよいだ！」という自信は、同時に杖を使った歩行訓練の意欲にもつながっていき、「運動会には、杖で“かけっこ”しよう！」がＡ児との合言葉になっていった。

エピソード６：リレーの作戦会議

運動会のリレーの作戦会議

リレーの走る順番について各グループに分かれて話し合う。Ａ児は終始笑顔だが自分で思ったことを言うことに躊躇した表情。

Ｅ児 「Ａ君のはしりたいじゅんばんは？」

Ａ児 「いま、かんがえてる」（ニヤニヤ）

また、他の子どもが次々と自分の思っていることを言い始める。

Ｅ児 「まって、いま、Ａ君がしゃべっとる！」

それぞれが話をしていて、なかなか決まらない

Ｆ児　「こんなときに、”かんがえる“」がおったらなあ。

Ａ児　「６ばんがいい」

話をしている友達に向かって、しばらく「６ばんがいい･･･」と言い続ける。

Ａ児　「あ！Ｃ君を５ばんにしたら･･･！」（仲よしのＣ児はその時欠席）

Ａ児　「Ｅ君、なんばんがいいだ」

Ｅ児　「７ばんがいい！」

Ａ児　「（ぼくの）おてつだいきめたー！おてつだいきめた！Ｇちゃん！」

保育者「Ｇ君、がんばれ！」

Ｇ児　「おならして、バーン！って（はしるぞ！）」

全員大笑い

改まった話し合いの中では、なかなか自分の思いを言い出せないＡ児。しかし、自分の思いを聞こうとしてくれる友だちＥ児に対して、勇気をもらい今度はその人の思いを聞こうとしている。

保育者は、運動会のＡ児の演技内容に迷っていた。“本児の得意なことに注目したい。子ども達が互いの思いに寄り添いながら仲間関係を深めている姿を何かの形で見てもらいたい。”と考えた。目標にしてきた“杖を使ったかけっこ”やリレーは、保育者が仲立ちとなってＡ児やクラスの子ども達の思いを出し合って、走る距離や方法を決めていった。

本番当日は、杖で歩いて見事かけっこのゴールテープを切り、Ａ児の得意なボールつき・三転倒立を披露。午前の演技最後にマーチングでバスマスターを見事演奏し、その直後、「まんぞくしかない！」と言い切ったＡ児。そして、閉会式でもらったメダルをそれはそれは大切にし、その日の夜は、大切に枕元に置いて寝たほどだった。

この、運動会の後、母親は「我が子がいとおしい」と話され、来年は、「車いすマラソンに出たい」「車いすバスケットをさせたい」など、明るい表情で将来の夢を話された。子育ての忙しさと小学校入学の不安から、表情が暗くなりがちだったが、Ａ児の自信に満ちた姿を改めて見たことで勇気づけられたように思う。そして、仲間と一緒に成長していることを、母親と一緒に確認できたことは、保育者集団にとって大きな喜びだった。

自信を持ったＡ児は、自分から友だちの遊びの中に入っていくようになる。また、周りの子ども達はと言うと、何人かの子が、Ａ児の杖でゆっくり歩くペースに合わせて一緒に歩き、「Ａちゃん、がんばれ」と声をかけるようになってきた。その場にいたみんなが、笑いながら会話をし、優しい表情になっていく。

そこで、Ａ児と周りの子ども達が、もっとお互いのことに関心を寄せるよう、保育士自身の関わり方を見直した。

【見直し②】

・Ａ君との関わりはできるだけ子ども集団に任せるようにし、保育士は少し距離をあけて見守る。

・トラブルも含め、子どもたちの積極的な関わりを大切にする。

* + 1. Ⅲ期「仲間と一緒に遊びたい」～保育士の見守りを土台にして～

エピソード７：一緒にトランプ遊び

Ｄ児・Ｈ児が本児をトランプやかるた遊びに積極的に誘う場面が多い。

Ｄ児　「Ａ君、トランプしよう」

Ａ児　「うん！いいでえ。」

しばらくして、Ａ児達の机を見ると、Ａ児が椅子に座ってＤ児達とトランプを楽しんでいる。

保育者「あれ？！Ａ君の椅子は、誰が動かしたの？」

Ｄ児　「え？ぼく。」

　　　　何かおかしい？あたりまえだけど･･･と言った表情で、仲間とのトランプ遊びを続ける。

運動会を終えた頃から、クラスの子どもたちが気の合う仲間とじっくりと遊び始め、Ａ児も、積極的に入っていくようになる。ところが、以前からＡ児をトランプやカルタ遊びに誘っていたＤ児が、徐々にＡ児に何かにつけて呼ばれるのを好ましく思わないような、態度が見受けられるようになってきていた。

エピソード８－①：「A君がおとした」

ある日の給食準備の時間。席を自由な場所にすることを保育士が提案。

Ａ児　　「Ｄ君いっしょにたべよう」

と言いながら、杖を使って離れた場所まで時間をかけて移動。

Ｄ児は嫌そうな顔をしながら、席を一つ移動する。

Ａ児はいつもと違うＤ児の雰囲気を感じつつも、隣に座る。表情は暗い。

そのうち、Ａ児の後方の掲示物が自然に落ちる。

Ｄ児　　「Ａ君がおとした。」

Ａ児は反論できずに机にうつ伏しているだけ。保育者が促しても顔を上げない。

今こそ、仲間の中に入っていくチャンス。自分ではっきり意思表示をすることが大切。“きっと、Ａ君なら言える。そして周りの子どもたちも、きっと、Ａ児の今までにない悲しい気持ちをそれぞれの受け止め方で感じているはず”という確信が、私にはあった。クラスの仲間にも、友達の本当の思いを知ることの大切さを伝えたいと思った。そこで

エピソード８－②：「ぼくがしたんじゃない」

保育者　「違うんだったら、はっきりと、僕がやったんじゃない、って言葉で言った方がいい。がんばってごらん･･･！」と立つように促す。

しばらくうつむいていたＡ児。

しっかりと前を向いて立った姿勢のままで、

Ａ児　　　「ぼくが、やったんじゃない！」

と言った後、思わず座って「わあー！！」と、大声で泣き続ける。

保育者「Ａ君、よく頑張っていったねえ。（泣いているＡ君の背中をなでながら）今度は、Ｄ君の番だよ。何がいけなかったかな？　（中略）　自分の目で見たことを言葉にするようにしてほしい。そうしないと、悲しい気持ちになる友だちが出てしまうよね。」

グループの友だちも、クラスの仲間も、神妙な面持ちで保育者の話を聞きながらＡ児が泣いているのを凝視している。

大の仲良しのC児は、目を充血させて涙を浮かべている。

C児　　「ごめんなさい・・・」

　　　　　保育者は、C児と目を合わせほほえむ。

Ａ児は、帰宅後、母親にその時の様子を笑って詳細に報告したとのこと。翌日には、ストレッチの場所にクラスの仲間もやってきて、みんなでその時のことを笑いながら振り返って話をし、「もう、いいだ。すんだだけ。」と言ったのはＡ児だった。

このようなやりとりは幼児期にはよくある場面であり、あるがままの姿を出し合う中で互いを知っていく事は大切。そして、トラブルが起きた時に保育者の関わりは重要であり、良し悪しを決めるのではなく、双方の思いを聞き取る作業が必要である。

それからというもの、Ａ児が友達に対して、トランプをしながらおかしいと思ったことを指摘する、けがをさせた友達に「ぜったいゆるさん！」と、心の底から怒る、など、友達に向けて感情をストレートに出す場面をよく見るようになった。

クラスの子どもたちはというと、杖を突いてトイレに行く際の転倒を予測して、Ａ児の前方を両手を広げてゆっくり歩く子。階段を時間かけて上がるＡ児の、「おうえんだんちょうだ！」と宣言して、必ず現れて「フレーフレーＡ君」と励ます子。劇に必要なＡ君の小道具のアイディアを一緒に考える子・・・と、保育者が傍にいなくても、互いの事を考え合って行動している場面が多くなり、この頃から、５～６人の仲間の中にＡ児がいるようになってくる。

エピソード９：A君に注意

担当保育者がいないと、保育者に抱いてもらって杖で歩こうとしないＡ児に、大きな声で諭すように･･･

Ｉ児　　「Ａちゃん、つえであるかんといけんでえ！○○せんせいにいっとくでえ！」

エピソード１０：対等なやりとり

クラスのみんなで〝じゃんけん汽車″をして遊ぶ

Ａ児は、杖をつきマスクをしているので、じゃんけんを口で言いながら遊ぶことを自分で決めている様子。しかし、知っているのは近くにいる仲間だけ。

最終的に、Ａ児が勝ち抜き一番先頭になる。

Ｊ児　　 「えーＡくんずるーい！あとでいったんだでえ！」

Ａ児　　 「えー！ぼく、ズルしてないで！さいしょ言ったけど、きこえんかったけえ、あとでいったんだで！」

保育者 「Ａ君は、ズルはしていないそうです。では、後ろの友だちに聞いてみたいと思います。どうですか？」

Ａ児の後ろの友だちに、インタビューのようにして聞く。

子ども 「ズルしてない」「ズルしてないで・・・」

保育者　「･･･だそうです。Jちゃん、いいですか？」

J児　 　「うん（うなずく）」

Ａ児は、慌てた表情から安心した表情になる。

これは、クラスの仲間として、対等な関係になりつつある中で出たやりとりだと感じた。

この頃、子ども達の関わりについて発達支援チーム会議で、

・保育者の注目がＡ君に偏っていないか

・一部の子との関係で終わらせずクラス全員の関係性を見る必要があるのではないか

・Ａ児への個別の療育面の支援と仲間関係の構築のバランスをどうしていくのか

などの意見交換をした。

それまで、私自身が「Ａ児」と「周りの子ども」という捉えを持っていることに気付き、「Ａ児も含めそれぞれの個性を持った子ども達」と捉え直した上で、仲間関係づくりを深めようと、担任間で見直しをした。

【見直し③】

　・それぞれの子どもの得意や楽しさを受け止め、クラスの仲間に発信する。

　・居心地のいいクラスにするために、意見を出し合う機会を作り、一人一人の出すアイディアを尊重する。

* + 1. Ⅳ期　「僕が楽しい、仲間も楽しい」～お互いを認め合う関係づくり～

春から楽しんでいたオニごっこ。その中でも“たすけオニ”は、仲間とつながりながらスリルを味わえ、Ａ児は大好きだった。Ⅰ期では、保育士が背負い、Ⅱ期～Ⅲ期は、四つん這いで逃げてはつかまり、または陣地の見張り役のオニになったりしていた。

エピソード１１：アイデアを出し合う

たすけオニのルールづくりでの話し合いの場面

「Ａ君は、フープで”バリア”のなかにいることにしよう。」

「なかにいるじかんは？」

「１０びょうは、みじかいなぁ。」「みじかい！１ぷん」

「フープは、何人かでもってＡ君がうごけるようにすればいい。」

「フープもっとったら、オニにつかまるで。」

「だから、そーっとおいて、いそいでにげるだが。」

Ａ児　　「そんなことしたって、いみないで。また、つかまるが。」

･･･いろいろな子どもが、アイデアを次々と出し合って、キャッチボールのような会話が続いた。

そして、12月。“たすけオニ”の要素のある、創作遊び「さかなつりオニ」をしている時の事。

エピソード１２：ぼくがたのしい、みんなもたのしい

みんなで遊べるように考えたアイデアでは、なかなかＡ児が楽しめる内容にならない。作戦会議をしていると、

Ａ児　「みんなも、ハイハイがいい」

とＡ児が発言したことにより、全員が四つん這いになって遊ぶことに･･･。

必死に追いかけてくる友達を、ギリギリのところでかわして逃げ切ろうとするＡ児。

仲間も、今までにないオニごっこを十分楽しんでいた。遊び終わって、

子ども「せんせい、ひざがいたい！」

保育者　「そうだねえ。いたかったねえ。Ａくんは、小さい時からずっとハイハイだったんだよねぇ。」

子ども達：（あー、そうだった…）というような表情をしていた。Ａ児はというと嬉しそうで、得意そうでもあった。

一人の友だちの為に仲間がアイデアを出し合い、そして、障がいのある子の発信で周りの子が一緒に遊びを楽しむ･･･。互いの違いを認め合う関係が生まれていると感じた。

・Ⅰ期にＡ児に対して「あるけんくせに」と言ったＢ児のその後。

母親に認められる経験の少なさから、自信の無かったＢ児。本児が苦手だと思っている事には、一緒に取り組み励まし成功体験へとつなげたり、得意な事を「Ｂちゃんは○○が上手だね。～みたい！」と褒めたりする事で自信がついて、以前に比べ表情が明るくなってきている。そして、Ａ児に椅子を出したり、杖を気にしてよけるなどの姿が見られるようになっている。今後も、自分とは異なる考えを持った友達を受け入れられる素地づくりを家庭と連携をとりながら、Ｂ児のありのままを認める関わりを続けていきたい。

この、Ⅳ期の仲間づくりは、今現在も続いている。

1. 成果と課題

身体の不自由さがあるため、様々な活動をあきらめそうになるＡ児だからこそ、幼児期には環境に働きかける意欲を育てることが重要と考え、様々な方法で関わってきた。加えて、友だちと色々な経験を重ねてきたことが、持ち前の「ぼくもやってみたい！」という興味関心の芽を大きく伸ばし、ここまで成長することができたと感じる。

また、周りの子ども達は、自分たちとの違いを確認しつつ何に困っているかを知ったり、保育者の関わり方を見たりして具体的に行動するようになってきた。これは、Ａ児との関わりの中で、他者への好ましい寄り添い方を見出し、人とつながるための素地づくりをしてきたと言える。

また母親は、集団の中で生き生きと活動しているわが子の姿に、母親自身が勇気づけられ、「人前にＡを連れて出られるようになった。」「どんなにしんどくても、乗り越えられるんだと思うようになった。」とまで話された。

しかし一方で、「小学校の保護者とつながることは大切だと思っているけれど、同じ保育園から行くのは一人だけ。うまくつながっていけるか正直不安。」と胸の内を明かされた。子どもの緊張を和らげるのは母親の元気と笑顔。その子の困り感を最大限取り除くことができるようにスムーズな移行を行い、入学後も細やかな連携を取る事、母親の良き理解者であり続けることが今後の課題と捉えている。

また、「障がい」という言葉を、当事者側から考えてみると、「生きにくさ」や「困り感」として感じられるものだと言える。実は、それは、障がいの有無に関わらず、「ありのままの自分」を否定された状況と考えると、「統合保育」の取り組みは、それぞれの子どもの個性を尊重する取り組みと言えることに気付いた。子ども一人ひとりの心の充実を保障することが、Ａ児も仲間の中でいきいきと活動できる、ということにつながる。引き続き、子ども達の何気ないエピソードに注目し、一人の解釈にとどまることなく職員間で姿を共有しながら、ありのままを受け止め、育ちを支える保育を目標にしていきたいと思う。

Ａ児親子には、今までたくさんの方に関わっていただいた。医療・福祉・教育、それぞれの機関の支えによって、成長が保障されてきたと言える。これから、たくさんの人との出会いが待っているが、思うようにならない時、力になってほしい時に、周りの誰かに声をかけるすべを、仲間やたくさんの人との出会いの中で知ったと思う。

Ａ児と子どもたちの成長を、先輩・同僚たちと共に喜び合い語り合った日々は、保育者としてとても豊かな時間でした。Ａ児との出会いに感謝したいと思います。

「Ａ君と周りの子どもたちとの関係づくりの目安」

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | Ⅰ期 | Ⅱ期 | Ⅲ期 | Ⅳ期 |
|  | 「僕もしてみたい！」 | 「友だちと同じようにしたい」 | 「仲間と一緒に遊びたい」 | 「僕がたのしい仲間もたのしい」 |
| Ａ　君 | ・自分のしてみたい事や困った事を保育士に素直に話す。・１対１なら友達と話がしやすい。 | ・保育士の見守りで、遊びの仲間に入る。・気の合う友達ができる。その友達に思っていることを話す。 | ・仲良しの友達ができ、複数の友だちの中に入って自分の思いを言いながら遊びを楽しむ。 | ・友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりして遊びを楽しむ。 |
| 周りの子ども | ・Ａ君が不自由なのは分かっている。・保育士の介助の仕方に関心をもって見る | ・保育士の真似をしてＡ君の杖を持ったり車いすを押したりする。・Ａ君ががんばっているのはすごいと感じる。 | ・Ａ君と遊べる道具を見つけたり、方法を考えようとする子がある。・Ａ君が何に困っているのか分かってすすんで行動する子が何人かいる。 | ・Ａ君と一緒に楽しめるように、遊びを工夫する。・思った事をＡ君と話したり、一緒に居ることを楽しいと感じる子がある。 |
| 保育士の支援（◎は母親支援） | ・Ａ君の中に「できる自分」を自覚できるよう、思いを実現させるための支援を惜しみなくする。・Ａ君と関わろうとする姿を認める。◎母親との信頼関係を深める。◎園と家庭で行うリハビリ内容を確認する。 | ・夏ならではの遊びの面白さを、仲間と共有できる環境設定を行う。◎就学に向けた連携の会等の連絡をこまめにしながら、母親の思いを聞き取る。 | ・小グループで共同制作やルールのある遊びを楽しみながら、双方の思いを出せるように配慮する。◎仲間との関わりの様子を送迎時に伝え、思いを聞き取る。クラス茶話会に誘う。 | ・思っていることを伝え合っている場面をとらえ“仲間の中のＡ君”を意識づける。◎就学に向けた相談に乗りながら、就学までにすべき事を確認し合う。 |